

【Ⅱ】音楽カリキュラム作成のために

1. 表出される音楽について心に留めておきたいこと

(1) 音楽は大人との関わりの中で育ってゆく

幼い子どもたちが、保護者や保育者から歌い聞かせてもらう悦びを享受することは何より大切にされなければなりません、それはやがて子どもたちの中に、大人をまねて歌ってみたい、踊ってみたいという欲求を生みだしてゆきます。音は目に見えませんが、音楽に合わせて体を動かすと、音は目に見えるようになります。ですから、保育の場で子どもたちと音楽活動を楽しむときには、手遊びや遊戯の前提となるような、体を揺らす、手をたたく、首を振る、足をぶらぶらさせる、歩くといった身体動作が伴われて歌われることが必要でしょう。というよりも、リズムが拍動によって生みだされることを思いだせば、それは当然のことなのです。

(2) 子どもの歌が生活から生まれる

子どもたちのつぶやきのような歌に注意を払いましょう。中でも子どもの発する喃語にあるリズムやメロディの断片を拾い上げ、保育者が復唱して子どもに返すことで、子どもは自分が発した音声に内包された音楽の断片を自覚することができます。オウム返しというと大人の言葉を復唱する子どもの側からばかり取り上げられますが、大人が子どもの音声を復唱するオウム返しにも重要な意味があるのではないのでしょうか。

有意味語を話すようになってからの子どもたちも、保育の場でよく歌っています。体がリズムカルに動くので、それに触発されて、発せられる言葉もリズムカルになり、やがてメロディらしきものも加わって、言葉を音楽的に発するようになるのでしょうか。このようなときもやはり、保育者は子どもの自然発生的な歌を復唱しましょう。オウム返しです。とりたてて子どもに聞かせるのではなく、さりげなく、歌うのがいいでしょう。

(3) アコースティックな響きを大切に

乳児期の子どもたちの造形活動がそうであるように、音楽活動もまた、そもそもの素材は戸外にあります。鳥の声、小川のせせらぎ、風の音、樹木の葉音などは直接耳に届く音ですが、鳥の羽ばたきや小川に浮かぶ波紋、木々の揺れなどは、身体の動きがそうであるようにリズムカルな繰り返しです。そのように動くものでなくても、錦秋の岩屋山には、色彩が織り成すリズムやハーモニーを感じ取ることができます。あるいは植栽や植え込み、柵などが等間隔に並ぶ様子もやはり、律動の繰り返しを伝えています。もっと小さな世界に目を向けると、葉脈の模様やバッタが飛び立つ瞬間にも、リズムを感じることができます。このように戸外は、耳と目で聞く音楽に満ち満ちています。それらはアコースティックな響きであり、心地よい安らぎやときに驚きを私たちに与えてくれます。

自然界がそうであるように、人もリズムを生きています。鼓動に始まり、歩くことや走ること、話すこと、押したり、引いたり、磨いたり、洗ったりといった動作、道具を操ること（たとえば鋸や金槌、鉋など繰り返しの動作によって使う道具はたくさんあります）

など、人の日常生活における動作や行動にリズムはいくらでも見つけだすことができます。

保育の場の子どもたちが、このような音楽以前の音楽や表出される音楽の世界に生きることをまずは弁えていることが、保育者が音楽活動のカリキュラムを考えるうえで大切です。

2. 表現される音楽について心に留めておきたいこと

表現される音楽についての留意事項の要点はすでに何度か取り上げてきましたので、ここでは子どもと音楽を楽しむことの意味について考えておきたいと思います。

ホールに楽器を並べて一緒に演奏したり、オペレッタの練習を楽しんだり、岩屋保育園では、子どもたちと音楽活動を楽しむ機会が豊富にあります。そのような経験が土台となってコンサートや発表会が終わった後にも、子どもたちが音楽で自分を表現したり、落ち込んだ気持ちを立て直す場面に会えることもしばしばです。たとえば、仲良しの年長女児が3人で作詞作曲して、保育園中の先生に聴かせて回ったことがありました。あるいは、自閉症を抱える年長男児がドラムセットを演奏する保育者を真似て、見事な撥捌きを披露してくれたこともありました。ドラムを担当していた保育者が歌う歌に合わせて、ドラムセットを操り、ただ闇雲に打ち鳴らすのではなく、まるで譜面を読んでいるかのように譜面に忠実な演奏でした。2人のセッションは何週間も続きました。それはクラスの練習が終わってからの特別な時間でした。それは音楽によるコミュニケーションそのものでした。やはり自閉症を抱える年中女児は、いつでも鍵盤ハーモニカを持ち歩いています。気が向くと取り出して演奏します。すぐに吹けるように歌口のホースは挿したままにしてあります。きっと気持ちが落ち着くのでしょう。自分を鍵盤ハーモニカ演奏に託すことができるのでしょう。

さて、最後にエピソードを一つ取り上げて、「音楽カリキュラム編成の基本的な考え方」のまとめとします。

エピソード センせいばいばい、せんせいよろしく

平成20年3月10日

(背景)

岩屋保育園の新年度は、3月第3週から始まる。卒園をまじかに控えた年長児はホールに集まって学校ごっこに取り組み、0歳から年中児までの子どもたちはそれぞれ、新しいクラスに進級する。このような新年度への移行は、3クラスある異年齢クラスの年長児たちが最後の2週間をいっしょに過ごせればと思ったことと、新入園児を迎えるまでにクラスづくりができていれば、新年度の慌ただしさも緩和されるのではないかと考えたからである。

旧クラスで進級メダルをもらった子どもたちは、まるで民族大移動のように保育園の中を行き交っていた。さくらんぼ組で新しい仲間を待っていた私は、泣いている子どもたちを何人も見かけた。1年をともに暮らした担任との別れが辛いのだ。そのような子どもは、新しいさくらんぼ組にもいた。年長になったまあちゃん(仮名)と、年中になったみいちゃん(仮名)だ。二人は旧担任を慕って、給食準備が始まってからもめそめそしたままだ

った。

(エピソード)

朝の集まりが始まっても、まあちゃんの悲しそうな表情に変化はなかった。杉浦保育士の膝に抱っこされて中川保育士の話を聞いている。みいちゃんはリュックを背負ったまま保育室の入り口に立っている。ほんとうは旧担任のいるクラスへ行きたいのだろうが、そこをぐっと我慢している。それでも出席調べでは、「はい」と小声で返事していた。

保育者の提案で、新しいさくらんぼ組は40人の子どもたちが4つの家にグルーピングされることになった。そのため、子どもたちは自分たちでお家づくりに取りかかることになった。そのあいだも二人は元気がない。みんなの中にはいるのだが、どこか所在なげにしている。私も水色の屋根の家を担当して、子どもたちを手伝った。正午を回り、とりあえず一段落したところで給食の準備に取りかかることになった。

ふと気づくと、まあちゃんとみいちゃんが、1週間まえの発表会で演じたばかりのオペレッタを再演している。ふたりは椅子に並んで腰掛けているので上半身だけの演技だが、オペレッタ「インドの6人兄弟」のオープニングからフィナーレまでを、歌いながら踊っている。さっきまでのふさぎ込んだ様子はすっかりどこかへ吹っ飛び、楽しくてしょうがないようだ。それを見ている子どもたちまで引きこまれてしまっている。私もロッカーにもたれて最後まで見とれてしまった。演じ終えたまあちゃんは、いつものまあちゃんに戻って、かいがいしく配膳をリードし、終わると中川先生に「もう食べてもいい？」と元気に尋ねに行き、OKをもらうと、「いただきます」の挨拶をみんなに促し、給食を食べ始めた。

(考察)

オペレッタを演じる楽しさが、二人の気持ちを立て直してくれた。音楽の持つ力にあらためて驚く。大好きな先生や友だちと楽しみながら覚えて演じた「インドの六人兄弟」。振り付けの説明まで音楽に合わせてやっている。私は、歌いながら踊るのはとても難しいと思っていたが、二人はなんなくそれをこなしている。こなしているというより、歌いながら踊るから楽しいようだ。保育の1年が、保育者から提案される内容と、子どもたちの自発的な活動とで構成されるとしたら、保育者から提供された保育が子どもたちの中にしっかりと根付いて、子どもたちの自発的な活動の中ににじみでるのだということを、ありありと見せられた場面だった。

保育者から持ちかける保育が子どもたちの自発的な活動の肥やしになるといっても、それが指導性の強い“させる保育”であったなら、子どもたちの中に根付くことはないだろう。歌詞とメロディを覚えて歌うことのおもしろさは、指導によっても伝えることはできるかもしれないが、オペレッタの練習やリハーサル、ビデオ撮り、本番を通して、“いっしょが楽しい”ことが子どもたちに共有され、しっかりと受け取られるのでなければ、まあちゃんとみいちゃんのように、つらさを乗り越える武器にオペレッタを使ってくれることはないだろう。

保育者が活動を提案するということ ～園長の個人的な体験とともに～

泣いたり、拗ねたり、落ち込んだり・・・、保育の場の子どもたちは、一日に幾度もつ

らい気持ちを味わうようです。エピソードの二人も、大好きな先生との別れのつらさをぐっと我慢していることが痛いほど分かるのですが、私たちはどうしてあげることもできませんでした。大泣きしたり、保育室を飛び出して旧担任のところへいってくれたほうがたすかったかもしれません。でも二人は、自分たちがおかれている状況をわきまえてはいても、こみあげる淋しさは自分でもどうすることもできないでいました。そのような二人に、私たちもなす術がありません。それだけに、オペレッタを演じるあいだに元気を取り戻した二人に驚き、そして安堵したのでした。

この短いエピソードの中にも、保育者が提案して子どもとともに取り組んだ活動がいくつも見られます。主題となったオペレッタもそうですが、家作りも、朝の集まりも、年度の節目に進級してクラス替えがあることも、保育者からの提案です。子どもは知らないことは知らないのですから、大人が配慮して生活が充実し、あたたかい“もの”や“こと”に出会って、いろいろな力をつけてゆくことは、保育の場に必要なことです。また保育園や幼稚園のような施設は、子どもが初めて社会的な集団と出会う場所ですから、集団への適応能力も保育の視野に入ります。ところが、保育者が設定した保育が、結果だけを求める保育になっていて、できたか、できなかったか、どれだけできたかといったことが物差しとなり、子どもが評価されることが少なくありません。私は何も、設定保育がよくないといっているわけでも、自由保育こそ保育だなどと主張しようというのでもありません。子どもと保育者が保育的環境を創造し、保育がゆたかに展開することが大切で、そのような創造と展開の過程に、子どもの心が育つ機会があると思うのです。

私が保育の場に足を踏み入れたころ、不思議に思ったことがふたつありました。ひとつは、ピアノの合図で子どもたちが一斉に立ち上がったときです。まるでホイッスルのようにピアノが使われたことと、立ちましようという先生の呼びかけもなしに、ジャン！というピアノの音で子どもたちが一斉に立ち上がったのを見て、これではピアノも子どももかわいそうだなと思いました。ピアノは音楽を奏でるために作られたはずだから、これではピアノへの冒涇ではないかと、若かった私は腹立たしい気持ちになりました。また、立ちましようといえは済むものを、合図で立たされるのでは、これは命令されているのと同じではないかと、やはりやりきれない思いでした。

エピソード「せんせいばいばい、せんせいよろしく」に出てきた朝の集まりでは、保育者は一度も集まりなさいとはいいませんでしたが、少し広くなったところに椅子が置かれ、絵本をもった先生が座って読み始めると、子どもたちはだんだん集まってきて、絵本に見入っています。積み木遊びが終らない子は、絵本に耳を傾けながらもこれでいいと思うところまでやり遂げようとしていました。そのようないつもの朝の風景の中で主人公のふたりは、その集まりを楽しむことができないばかりか、みいちゃんは集まりの輪に入ることさえできずにいたのでした。このように、保育者の提案に対して、一人ひとりの子どもがどのように取り組もうとするのか、そこには子どものどのような気持ちがはたらいっているのか、その気持ちや子どもの振る舞いは、どのように変化したか、そうした過程が保育です。保育は、ピアノの合図で一斉に座れるように子どもをしつけることでもなければ、発表会当日目指して、子どもたちに保育者の大声が浴びせかけられることでもないはずで

子どもが落ち込んだ気持ちを自分で立て直すのを手伝うことはできても、子ども自身に気持ちを切り替えてもらえなければ、その場しのぎのごまかしになってしまいます。おな

じように、子ども自身がオペレッタに興味を示し、自分からやってみたいと思う、取り組んでみたら楽しかった、みんなといっしょは楽しい、そういった経験を積み重ねることが保育です。その過程をゆたかにするために、保育者は環境を整えて、子どもを待つのです。

さて、若いころに不思議に思ったことのもうひとつは、歌です。子どもが初めて出会う歌なのに、短いフレーズごとに先生が歌って聞かせ、それを子どもたちに何度も復唱させたり、給食のいただきますのまえに、とにかくひととおりの歌わせたりといったことが繰り返されていたことでした。

先生がふたりいて、ひとりが伴奏し、ひとりが歌って、ふたりで音楽を楽しむ姿をどうして見せてあげられないのだろう。歌うって楽しいねを、どうして身をもって子どもに示さないのだろう、私はそう思ったのです。保育者自身が音楽の楽しさを子どもたちに伝え、僕も私もやってみたい、歌ってみたいと思ってもらい、そう思った子から歌に参加してくればいいのにとつよく思いました。早く覚えて歌えるようになるという結果だけが追い求められ、それがあたりまえのようにならないためにも、まずは保育者が心から音楽を楽しむことが肝要です。